

## 発刊によせて

生成AIの進展が著しい。今日では、ChatGPTやAI音声などが私たちの日常生活に広く浸透している。教育界も例外ではない。教師が授業の準備をするとき、あるいは学生がレポートを作成するとき、ChatGPT等を活用するのが、もはや当たり前になつてきている。

AIの登場により、教育のあり方は、ここ十年二十年のうちに大きく変わつっていくであろう。例えば、すでに「教師のいない塾」が日本全国にチエーンとして展開されている。また、「校舎のない学校」も人気である。「N校」のような通信制の高校が何万人もの生徒を集め、世間の話題になつてている。AI技術の進歩とともに教育のオンライン化は、加速度的に進んでいくと思われる。

こうした教育環境の大きな変化のなかで、改めて問われるのが教師の役割であろう。つまり、「AIにできなくて人間にできることは何か」という問題である。「人間力の育成」を掲げる本法人の精神から言えば、「学生を信ずる」「学生を護る」「学生とともに悩む」「学生の模範になる」という極めて人間的な交わりこそが、人間の教師に課せられた最大の責務となろう。教師が一個の人間として学生と赤裸々に語り合い、目に見えない感化を及ぼしていく。これが、じつは知識の伝授よりもさらに重要な、教育の眼目ではないだろうか。

「他人を思いやれ」「信念を貫け」などの道徳的知識、あるいは「価値を創造せよ」「ピンチをチャンスに変える」といつ

た処世術の知識を、大概の人たちは知っている。ただし、それらを実行できる人は少ない。「わかつていてもできない」のが人間の悲しさであり、弱さだからである。けれども、人間は誰かの支えで強くもなれる。師と仰ぐ人から受けた人間的な感化が、人生の困難を乗り切る力になることは珍しくない。A.I.でなく人間の教師による見えざる感化——これのみが学生の人間力を育みうるのである。

本学では令和九年四月を目途として「デジタル創造学科（仮称）」の設置を目指して準備が進められている。また、文部科学省の令和五年度大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業～米国等との大学間交流形成支援～」の選定において、本学と福島高専が共同で提案した「未来へつながるコミュニティを創る日米大学間復興創生交流事業（令和五年度～九年度）」が採択された。こうした躍進の土台には、建学の精神が脈打っている。当研究所は建学の精神の飽くなき探求を使命として、これからも本学の更なる発展の原動力になつていきたいと決意している。

令和七年二月

東日本国際大学  
東洋思想研究所所長  
松岡幹夫